

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02218

研究課題名(和文) 18世紀から20世紀にかけての英語圏を中心とした常識概念の思想的、哲学的検討

研究課題名(英文) the Historical and Philosophical Examination of the Idea of Common Sense in the English Speaking World from 18th century to 20th century

研究代表者

青木 裕子 (Aoki, Hiroko)

武蔵野大学・法学部・准教授

研究者番号：60635671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究グループは科研費受給期間中コンスタントに研究成果を発表した。主な活動を四点挙げる。第一に「常識と啓蒙研究会」を年二回開催した。第二に、2018年3月に日本イギリス哲学会第42回研究大会においてセッション「コモン・センスとコンヴェンション 18世紀英米思想における人間生活の基盤」のコーディネイトと研究報告を行った。第三に、2019年10月に武蔵野大学政治経済研究所主催のオール英語の国際シンポジウムをコーディネイトし、本研究グループと米国の研究者が研究報告を行った。第四に、2020年2月には本研究プロジェクトの最終報告として『「常識」によって新たな世界は切り拓けるか』(晃洋書房)を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究プロジェクトで様々な哲学者と思想家が捉えた常識概念を検討することによって、常識という言葉が多様な使われ方をしていることが明らかになった。そしてそれだけでなく、常識という概念に注目することによって、思想史研究の分野ではこれまで見過ごされてきた新たな切り口や新たな構図が見えてきた。また、コモン・センス哲学とアメリカにおいて発展したプラグマティズムの関係性に注目すると、アメリカのデモクラシーやリベラリズムを理解するうえで有意義であることが見えてきた。この研究プロジェクトにおいてメンバー各自が自分の持ち分に真摯に取り組んできた結果、学術的にも社会的にも有意義なパノラマが見えてきたと考えている。

研究成果の概要(英文)：We had released our research outcomes constantly. First of all, we held research workshop "Common Sense and Enlightenment" twice an year. Secondly, in March 2018, we coordinated the session "Common Sense and Convention" at the 42nd annual conference of Japanese Society for British Philosophy and gave our research presentations. Thirdly, in October 2019, we coordinated Japanese and American researchers for the international symposium held by Musashino University, and gave research presentations. Fourthly, we published "Can we open up a new World by 'Common Sense'?" (in Japanese) from Koyo Shobo as the final report of our research project.

研究分野：思想史

キーワード：常識(コモン・センス)、啓蒙、スコットランド啓蒙、常識哲学(コモン・センス哲学)、アダム・ファースン、ウィットゲンシュタイン、イギリス哲学、アメリカ思想

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

科学研究費助成事業 研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

[趣旨、着想に至った経緯、これまでの研究成果]

我々の思考や活動はそれに意味を与える共有された制度、文化、実践なくして成立しないということを否定する人はもはや存在しないと思われる。しかし、そのような共有された背景が、どのような仕方で我々の思考や活動と織り合わされているのかという点については、様々な哲学的見解があり、必ずしも明確なコンセンサスがあるわけではない。従って、我々の思考や活動を規定する共有された背景に対し、その意義を積極的に評価するにせよ、批判的な態度を取るにせよ、出発点として必要なはそのありようを哲学的に分析し、理解することである。特に、グローバル化が進展し、個人の思考や活動を規定する背景が必ずしも明確ではなくなった現在こそ、我々の思考と活動を規定する背景を、その政治的、文化的、認識的役割といった多様な視点から分析し、把握することは喫緊の課題である。

このような問題意識の下で哲学史を振り返るとき、我々は英語圏の哲学の中に、スコットランド常識学派や G. E. ムーア、L. ウィトゲンシュタインといった、我々の思考や活動の背景としての「常識 (common sense)」を重視する哲学の潮流を見出すことができる。応募者はすでに平成 25-27 年度の「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜とその現代的意義についての研究(基盤 C)」において、18 世紀スコットランドから 20 世紀ケンブリッジへと至る常識と啓蒙の思想の系譜について検討を重ね、リード、A. ファーガスン、ムーア、ウィトゲンシュタインといった「啓蒙的でありながらも常識を重視する」哲学者たちについて様々な角度から比較検討を行ってきた。その最終成果は研究報告書および日本イギリス哲学会第 40 回大会シンポジウム(平成 28 年 3 月 29 日、於 学習院大学)にて発表予定であるが、これまでの研究から明らかになってきたのは、当初の予想以上に「常識」という概念が英語圏の哲学、思想において多様な現れをしているということである。

そこで本研究は上記の研究の成果を受け、英語圏における「常識」の思想の多様な展開を再検討し、その思想史的意義および、哲学的意義を解明することを目的とする。このように「常識」を視座として英語圏の哲学史を再検討するならば、ただちに、以下のような興味深い問いが現れてくる。例えば、G. バークリのような同じく「常識」をキーワードの一つとするその他の英語圏の哲学者との関係をどのように理解すればよいのだろうか。あるいは、歴史的事実としては、ムーアはリードの著作から大きな影響を受けているが、ムーアやウィトゲンシュタインが「common sense」と呼ぶものを、スコットランド啓蒙思想における「common sense」とどこまで同一視してよいのだろうか。本研究はこのような英語圏における常識概念を巡る思想史的、哲学的な問いを手掛かりに、「常識」が我々の生において現に果たしている役割、そしてまた果たすべき役割について、体系的な吟味を行うことを目指すものである。より、具体的には以下の項目が研究課題となる。

[スコットランド啓蒙思想における常識学派の位置付けに関する研究の現状と本研究の課題]

リードやスチュワートに代表されるスコットランド常識学派はスコットランド啓蒙思想の有力な一派として位置付けられてきたが、実際にスコットランド啓蒙思想全体と常識学派の関係について、明快な理解が得られているとは言い難い。本研究では、K. ホーコンセン、P. ウッド、篠原久、田中秀夫、長尾伸一らの先行研究を参照しつつ、常識学派のスコットランド啓蒙思想における位置について検討を加える。

また比較の対象として、スコットランド啓蒙思想と同時代の保守思想における常識概念の展開も検

討する。具体的には、E. バークの政治思想、経済思想を「精神」「原理」などのキータームに注目しつつ分析し、常識学派の思想と比較する。

[スコットランド常識学派のアメリカ思想への影響に関する研究の現状と本研究の課題]

スコットランド啓蒙のアメリカ思想への影響については、J. ポーコックや田中秀夫による先行研究があるが、その際必ずしも常識学派が分析の中心に据えられてきたわけではなく、また、常識学派とその他のスコットランドの思想家たちを包括的にスコットランド啓蒙と捉えられてきた。そこで本研究では、上記の先行研究を踏まえた上で、常識学派がアメリカ建国の父たちに与えた影響について詳細に分析し検討する。

[リード哲学とムーア、ウィトゲンシュタイン哲学の関係に関する研究の現状と本研究の課題]

近年、分析哲学におけるムーアの再評価に伴い、特に認識論の場面において、リード、ムーア、ウィトゲンシュタインの哲学が第一線の分析哲学者により、比較検討されるようになった。(例えば、J. グレコ、D. プリチャード、C. ライトらの研究を参照。)しかし、その際、「常識」という概念がキーワードとなっているわけではなく、また認識論以外の場面での比較はほとんど行われていない。そこで、本研究では、上記の研究成果を踏まえつつ、「常識」の概念に焦点を当て、彼らの「常識」概念の類似と相違が、認識論、倫理学、宗教哲学などの様々な哲学的場面にどのように現れているのかを体系的に検討することを目指す。

[イギリスの経験論における「常識」概念の位置付けに関する研究の現状と本研究の課題]

スコットランド常識学派は、18世紀イギリス思想における唯一の常識思想ではない。実際、リードが「観念学説」として批判したバークリやヒュームの哲学においても、「常識」概念が無視されているわけではない。例えば、バークリ哲学においては、「常識」はその哲学上のキーワードとして、研究の一つの焦点となっている。(J. ベネット、A. ルース、G. パパス、戸田剛文らの研究を参照。)本研究では、先行研究を踏まえつつも、常識学派とバークリ、ヒュームらイギリス経験論の哲学者たちの常識概念を比較検討し、18世紀イギリス思想全体における「常識」概念の多様な現れを検討する。

2. 研究の目的

本研究は18世紀から20世紀にかけての英語圏の哲学、思想における「常識 (common sense)」概念の多様な展開を、哲学研究、思想史研究の両面から解明することを目的としている。具体的には、スコットランド常識学派、G. E. ムーア、L. ウィトゲンシュタインら「常識」を重視する哲学者の常識思想の検討を行うとともに、これらの哲学者の常識思想をアメリカ建国思想、イギリス経験論などに見られる常識思想と比較、検討する

3. 研究の方法

18世紀から20世紀にかけての英語圏の哲学、思想を「常識」をキーワードとして分析する。また、思想史研究と哲学研究の両分野の研究者の議論、交流を促進し、それぞれに独立して蓄積されてきた研究成果の統合、発展を目指す。具体的には、①基礎的文献の検討、②研究会での研究成果の共有、発展、③国内外での学会発表、④ワークショップおよびシンポジウムの開催、⑤報告書の作成などを主に行う。

[研究方法]

本研究は18世紀から20世紀にかけての英語圏の「常識」に関わる哲学、思想を哲学的、思想史

的に検討するものであり、その主要な方法は関連テキストの検討に基づく概念の分析となる。しかし、本研究は更に、思想史研究と哲学研究に独立して蓄積されてきた成果を統合、発展させることも意図しており、上記の分析的な方法は、両分野の研究者による議論により補われる必要がある。応募者はすでに、平成 25-27 年度の「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜とその現代的意義についての研究(基盤 C)」に基づき、「常識と啓蒙研究会」を立ち上げ、思想史研究者と哲学研究者による議論、交流を積み重ねてきた。そこでは、例えば思想史上の「マナーズ」概念とウィトゲンシュタイン哲学における「生活形式」概念の相違が議論されるなど、思想史研究、哲学研究のどちらか一方に依ってはいは得られなかったであろう観点が得られた。本研究でも、この「常識と啓蒙研究会」をベースとし、思想史研究者、哲学研究者の議論、交流を更に積み重ねる予定である。具体的な年度別研究計画は以下の通りである。

4. 研究成果

本研究グループは科研費受給期間中コンスタントに研究成果を発表した。主な活動を四点挙げる。第一に「常識と啓蒙研究会」を年二回開催した。第二に、2018年3月に日本イギリス哲学会第42回研究大会においてセッション「コモン・センスとコンヴェンション—18世紀英米思想における人間生活の基盤」のコーディネイトと研究報告を行った。第三に、2019年10月に武蔵野大学政治経済研究所主催のオール英語の国際シンポジウムをコーディネイトし、本研究グループと米国の研究者が研究報告を行った。第四に、2020年2月には本研究プロジェクトの最終報告として『「常識」によって新たな世界は切り拓けるか』（晃洋書房）を出版した。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Fischer Eugen, Engelhardt Paul E., Horvath Joachim, Ohtani Hiroshi	4. 巻 17 January 2019
2. 論文標題 Experimental ordinary language philosophy: a cross-linguistic study of defeasible default inferences	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Synthese	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1007/s11229-019-02081-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 古田徹也	4. 巻 34
2. 論文標題 共同行為論の射程：分析系の議論を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 片山文雄	4. 巻 3
2. 論文標題 教職課程で「日本国憲法」をどう教えるか（3）いわゆる私人間効力論の教え方について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北工業大学 教職研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ohtani, Hiroshi	4. 巻 49
2. 論文標題 World-Pictures and Wittgensteinian Certainty	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Metaphilosophy	6. 最初と最後の頁 115 ~ 136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/meta.12288	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 第32号
2. 論文標題 現代の英米圏の倫理学における運の問題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会と倫理	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷弘	4. 巻 41
2. 論文標題 常識と啓蒙の哲学者としてのウィトゲンシュタイン	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Ohtani	4. 巻 2017
2. 論文標題 Philosophical pictures about mathematics: Wittgenstein and contradiction	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Synthese	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11229-017-1317-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤空	4. 巻 58
2. 論文標題 征服と交流の文明社会史 - 初期バークと近世ブリテンにおける歴史叙述の系譜	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 経済学史研究	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sora Sato	4. 巻 13
2. 論文標題 ・Vigour, Enthusiasm and Principles: Edmund Burke's Views of European History	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Modern Intellectual History	6. 最初と最後の頁 299-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1017/S1479244314000481	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 青木裕子
2. 発表標題 アダム・ファーガスン『市民社会史論』の特徴と独自性から考える新訳出版の意義とアクチュアリティ (セッション: 近代の古典文献と社会思想史研究)
3. 学会等名 第43回社会思想史学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 初期アメリカ共和国における主権理論の模索
3. 学会等名 第43回社会思想史学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷弘
2. 発表標題 ウィトゲンシュタインにおける確実性と不確実性 (シンポジウムII: ケインズ・ウィトゲンシュタイン・ハイエク 不確実性の時代の秘められた知的連関)
3. 学会等名 第43回日本イギリス哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木裕子
2. 発表標題 アダム・ファーガソンの完全可能主義 (perfectibilianism) とコモン・センス学派との親和性
3. 学会等名 日本イギリス哲学会第42回研究大会セッション
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 イギリス領北アメリカ植民地の指導者層にとっての常識哲学
3. 学会等名 日本イギリス哲学会第42回研究大会セッション
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野村智清
2. 発表標題 パークリと証言
3. 学会等名 日本哲学会第76回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 共同行為論の射程 分析系の議論を中心に
3. 学会等名 日本現象学会2017年度年度研究大会 (第39回)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sora Sato
2. 発表標題 Chains of Order, War and Spirit: Rethinking of Edmund Burke ' s Economic Thought
3. 学会等名 History of Economics Society
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 アダム・ファーガスン著、天羽 康夫・青木 裕子訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 456
3. 書名 市民社会史論	

1. 著者名 古田 徹也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 256
3. 書名 言葉の魂の哲学	

1. 著者名 Sora Sato	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 XIV, 281
3. 書名 Edmund Burke as Historian: War, Order and Civilisation	

1. 著者名 Sora Sato	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 XIV, 281
3. 書名 Edmund Burke as Historian: War, Order and Civilisation	

1. 著者名 中澤信彦、桑島秀樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 304
3. 書名 パーク読本	

1. 著者名 石川敬史	4. 発行年 2016年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 390
3. 書名 アメリカ帝国の胎動ーヨーロッパ国際秩序とアメリカの独立	

1. 著者名 大谷弘	4. 発行年 2016年
2. 出版社 リベルタス出版	5. 総ページ数 269
3. 書名 これからのワイトゲンシュタイン 刷新と応用のための14篇	

1. 著者名 古田徹也	4. 発行年 2016年
2. 出版社 リベルタス出版	5. 総ページ数 269
3. 書名 これからのウィトゲンシュタイン	

1. 著者名 ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン著, 古田徹也訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 514
3. 書名 ラスト・ライティングス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古田 徹也 (Furuta Tetsuya) (00710394)	東京大学・文学部・准教授 (12601)	
研究分担者	大谷 弘 (Ohtani Hiroshi) (30584825)	東京女子大学・現代教養学部・准教授 (32652)	
研究分担者	片山 文雄 (Katayama Fumio) (40364400)	東北工業大学・教職課程センター・准教授 (31303)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 敬史 (Ishikawa Hirofumi) (40374178)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	
研究分担者	佐藤 空 (Sato Sora) (60749307)	東洋大学・経済学部・講師 (32663)	
研究分担者	野村 智清 (Tomokiyo Nomura) (90758939)	秀明大学・学校教師学部・講師 (32513)	